

# 古典籍の知識構造を起点としたアクセス手法の提案\*

太田あす香 (学籍番号 201021736)

研究指導教員：宇陀則彦

## 1. はじめに

本研究は電子環境下における古典籍への網羅的な書誌的アクセスに関する問題をテーマとしている。古典籍を扱う資料研究においては、研究対象とする作品について、現存する全ての古典籍にアクセスする必要がある。本研究がテーマとした「古典籍への網羅的な書誌的アクセス」とは、このような資料研究特有のニーズを背景とするものである。

今日の図書館の書誌的アクセスは、蔵書目録の各項目をアクセスポイントとし、その機械可読レコードに対する自然言語処理的アプローチを主な手法としている[1]。これにより、一般的な図書に対する書誌的アクセスの利便性は飛躍的に向上した。しかしながら、古典籍に対する書誌的アクセスは、未だその利便性が低いままである。

そこで本研究では、電子環境下での古典籍への網羅的な書誌的アクセスの実現を目的とし、古典籍の知識構造を起点とするアクセス手法を提案した。そして、資料研究者の提案手法に対する意見を調査し、電子環境下での書誌的アクセスに対する彼らの要求を明らかにした。

## 2. 古典籍の特徴と書誌的アクセスの現状

古典籍とは、日本で出版・書写され、慶応4年以前に完成した図書を指す。その数は115万点以上にのぼるとされており[2]、ひとつの作品について、数十、数百の古典籍が存在する。これらの古典籍は文章の類似度によって分類されており、これを古典籍の文献学的分類と呼ぶ。そのほか、それぞれの古典籍を現代の活字におこした活字本も存在する。

これらの書誌データや画像は、国文学研究資料館が提供する「日本古典籍総合目録」、国立情

報学研究所が提供する「NACSIS-CAT」、図書館や博物館が個別に公開しているデジタルアーカイブ等でそれぞれ公開されている。しかしながら、ある作品について古典籍がどのくらいあるか、それらの古典籍の文献学的分類はどのようなか、ある古典籍についてどの活字本が対になっているのか、どの画像が対になっているのか、といった情報はどのシステムにも記述されていない。よって、資料研究者は未だ印刷体の専門的な目録を用いてアクセスしているのが現状である。しかし、この目録も頻繁に出版・改訂されるものではないため、資料研究者にとっても最新の情報にアクセスするツールとはなり得ていない。

## 3. 提案手法

そこで、本研究では電子環境下において古典籍へアクセスする手法として、知識構造を起点とするアクセス手法を提案した。本研究でいう「古典籍の知識構造」とは、資料研究者が作成した古典籍の文献学的分類をXMLにマークアップし、アクセスポイントとして利用できるようにしたデータのことである。古典籍の文献学的分類は、印刷体の専門的な目録に記載されている。提案手法ではこのデータを用い、古典籍の詳細な書誌データと活字本のタイトル、web上の画像へのリンクを示す。また、活字本については、その本を所蔵している大学図書館のリストを示す。これによって、古典籍と活字本、画像へのアクセスを実現した。

## 4. 知識構造を起点としたプロトタイプシステム

日本古典文学9作品、148冊の古典籍を対象として、提案手法に基づいたプロトタイプシステムを構築した。システムの機能は大きく分けて3つの機能がある。1つめの機能は、ある作

\*“A proposal of the access method based on the knowledge structure of manuscripts” by Asuka OTA

品についてどれだけの古典籍があり、どのように文献学的な分類がされているかをブラウジングする機能、2 つめは、古典籍の文献学的分類から古典籍の書誌データを表示する機能、3 つめは、選択した古典籍と対になる活字本の所蔵や画像へとリンクする機能である。

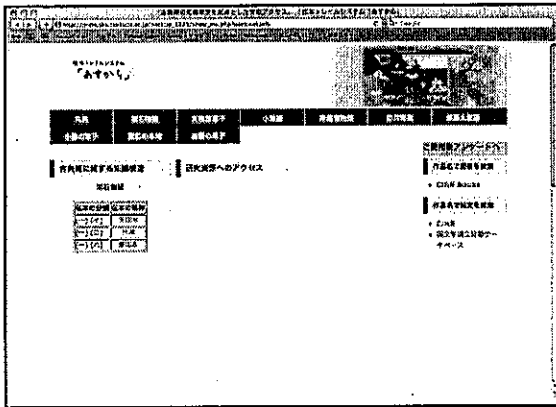


図1 システムのメイン画面

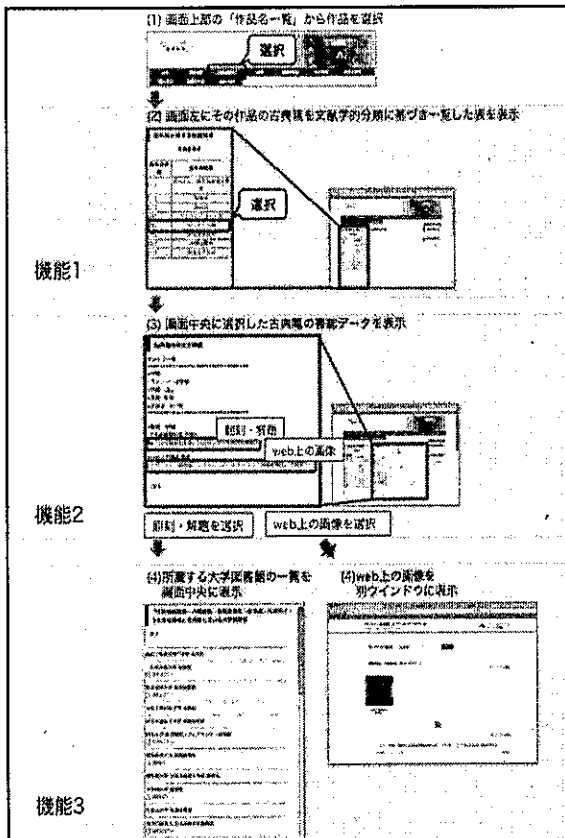


図2 システムの画面遷移と各機能の表示

### 5. 資料研究者による評価

電子環境下での人文科学研究に関心を持つ人

文科学研究者 52 名に対し、システムの使用とアンケートからなる調査への協力を依頼し、17 名から回答を得た。

調査の結果、提案手法に関しては、人文科学研究者にとって有益であるという意見が得られた。その理由として、1)基礎的な作業がスムーズに行えるから、2)文化資源についての関連知識の構造化と集約は重要であるから、3)様々な文化資源に対し様々な知識構造をもって適用できる手法だから、といった意見が見られた。一方課題として、1)研究者に対し提示する情報の設定が困難、2)用いた知識構造が批判対象という場合もある、3)1つの知識構造だけでは適用できる対象が狭い、といった意見が寄せられた。

電子環境下での研究基盤整備に関しては、古典籍に関する専門知識を書き込みたいとして利用者参加型機能を求める意見が多数見られた。この意見は、システム構築経験のない人文科学研究者からも寄せられたことから、これまで印刷体の専門的な目録で行われてきた情報流通が、電子環境下でも行われるように変化する可能性が示された。

### 6. まとめ

本研究では、電子環境下での古典籍への書誌的アクセスの手法として、古典籍の知識構造を起点とするアクセス手法を提案した。評価によって、提案手法は資料研究者にとって有益と確認された。また、専門的な書誌データについて情報交換を行う場が電子環境下に求められていることが明らかになった。今後の課題は、他の分野の資料を用いたプロトタイプシステムの構築と、より詳細な調査である。

### 文献

- [1] “アクセスポイント”. 図書館情報学用語辞典. 第3版, 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 丸善, 2007, pp. 2.
- [2] 国文学研究資料館整理閲覧室. 古典籍所蔵状況調査の結果について. 国文学研究資料館報. 1982, vol.19, pp.10.